家に帰ると前世の嫁を名乗る女の子が居た【完結】

トマトルテ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

学校から家に帰った俺を真顔で出迎える前世の嫁を名乗る女の子。

取り敢えず不法侵入なので警察に通報する俺。

そこから始まる俺と彼女の同居生活。

これは俺と彼女の愛の存在証明。

目　次

1話：家に帰ると嫁（前世）が居る　1
2話：信じるということ　14
3話：あなたを愛しています　27

1話：家に帰ると嫁（前世）が居る

「ただいまー」
「お帰り、太郎……今日は早かったね」
「んー、部活が休みだったからかな」
「そっか……それで早かったんだ」
家に帰るとすぐに、黒髪ロングのザ・大和撫子といった感じの女の子の出迎えがあった。
俺がその出迎えに適当に返事を返していると、女の子は俺の気を利かせて鞄を持ってくれる。
そんな、さりげない気遣いに俺の中での女の子への好感度は１０％アップだ。
「……今日は太郎の好きなカレー作ってみた」
「お、それは楽しみだな」
「……期待してて」
そう言って、無表情な顔にほんの少し笑みを浮かべる女の子。

非常に可愛らしく、殺風景な我が家の中でそこだけ花が咲いたように感じる程だ。
ただ、俺にはどうしても1つだけ気になることがあった。
「なあ、1つ聞きたいことがあるんだけどいいか？」
「……どうしたの？」
無表情ながらも可愛らしく小首を傾げる女の子。
うん。非常に愛くるしい仕草で思わず守ってあげたくなる。
しかし、しかしだ。

「――――君は誰だ？」

俺はこの子を知らない。
そもそも、俺は両親が海外に出張しているので1人暮らしだ。
出迎えという行為自体があるはずがない。
そんな俺の至極真っ当な疑問に対して女の子の反応と言えば。
「美衣（みい）は美衣（みい）だよ…？」
至極当たり前の顔をして名前を名乗るだけだった。
「いや、そのだな。名前を教えてくれたのは嬉しいんだけど、俺が聞きたかったのは君が

どこの誰で、どうして俺の家に居るのか、それと出来れば俺との関係性を教えて欲しいんだが」

「…私は隣町の第三高校に通う長谷川美衣。…太郎の家に居るのは太郎を御出迎えするため。…関係性は……太郎は忘れちゃったの？」

さらに深く聞いてみるが、相変わらずの起伏の無い声でさらさらと答えられてしまう。

そして、極めつけは『忘れたの？』だ。

思わず俺に非があるのかと思い、必死に記憶をまさぐってしまう。

しかし、幾ら必死に記憶をたどってもこんな女の子の情報は出てこない。

良くある昔引っ越した幼馴染み展開かとも思ったが、男の幼馴染みしか居ないのでそれも違う。

本格的に思い出すことが出来ずに、謝罪の念を込めて美衣に深く頭を下げる。

「ごめん。俺が悪いんだけど、君のことがどうしても思い出せない。本当に申し訳ないんだけど、もう一度君のことを俺に教えてくれないかな？」

「そっか……ううん。太郎は悪くないよ。…普通なら忘れてると思うし」

「そんなに昔ってことかな？」

「…うん。太郎と美衣は」

誠心誠意の謝罪が功を奏したのか、美衣は怒ることなく俺の疑問に答えてくれる。
そして、その内容とは。

「……前世でも夫婦だったんだよ」

色々とぶっ飛んだ内容だった。
「なるほどな……」
「太郎…スマホを取り出してどこに電話してるの…？」
俺は美衣がどんな人間なのかを理解すると、すぐにスマホを取り出す。
そして、ある場所へと電話をかける。
俺の想像が間違っていなければ美衣という女の子は、間違いなく。
「すいません、警察ですか？　家に不審者が侵入しています」
色々と危ない子だ。

「ちくしょう……『前世の嫁を名乗る女の子にかいがいしく出迎えられた』なんて、あるがままに喋るんじゃなかった。おかげで現実と妄想の区別がついていない奴だと思わ

れたじゃないか…」

5分後、精神に多大なるダメージを受けた状態で椅子に座りこむ俺。

寝言は寝て言えという言葉を、まさか自分が言われる日が来るとは思わなかった。

「……元気出して太郎」

「すまん、美衣。こんな優しい子が嘘をつくわけないよな」

「…うん。私は太郎に嘘なんてつかないよ…教えて欲しいことがあるなら何でも教えてあげる」

疑いをかけた上に、警察に通報をしたというのに美衣は俺を慰めてくれる。

美少女にこんなにも優しくされては、荒唐無稽の話であっても信じざるを得ない。

俺は一先ず美衣の言葉を信じて、詳しく話を聞いてみることにする。

「なあ、美衣。悪いけど、もう少し詳しくさっきの話をしてくれないか?」

「…うん、いいよ」

そして、美衣が淡々とした口調で説明をしていく。

「なるほど……美衣には前世の記憶があって、その前世で俺と夫婦だったわけか」

「…うん」

「それで前世のお、夫である俺を見つけて、その嬉しさのあまりにこうして家に来たと」

「そういうこと…」

取り敢えず、立ったまま話すのもあれなのでリビングに移動し椅子に座る。その時にさりげなくお茶が置かれたのを見て、既に我が家の構造を知り尽くしている美衣に軽く戦慄するが、もう気にしないことにした。

「説明は良く分かった。でもだ。どうやって俺が前世の夫だって分かったんだ？　もしかして顔とか名前も同じとか？」

「そういうわけじゃないけど……私はあなたを見間違えないよ」

「なんでそう断言できるんだ？」

無表情ながら余りにも自信満々に答えるものなので、思わず何故かと問いかけてしまう。

そんな俺の不躾な質問に怒ることもなく、美衣は堂々と答える。

「だって……あなたを愛しているから」

不意打ちだ。あまりにも真っすぐなその言葉は、彼女いない歴＝年齢の俺には刺激が強すぎた。首筋がカッと熱くなっているのを自覚しながら、俺はモゴモゴと口ごもったように言葉を返す。

「あ、ありがとうな」

「…どういたしまして」

礼を返すと、はにかんだ笑みを浮かべてくれる美衣。

その表情が余りにも可愛らしくて、思わずポケッと見つめてしまうが、慌てて顔を振る。

今、大切なのはそういうことじゃない。

「ゴホン、まあ、前世云々は一先ず置いておいてだな。美衣、君はまだ高校生の女の子なんだから、男の家に上がり込むなんてしたらダメだろ？」

「……美衣は太郎になら何をされてもいいよ…夫婦だし」

無表情なのに、ポッと頬を赤らめながら上目遣いを送ってくる美衣。

そんな仕草に思わず、クラっと来てしまうが、学園一の紳士を自称する俺は揺らがない。

別にヘタレとかいう訳じゃないぞ。

「いや、そのだな。美衣が良くても親御さんは色々と心配したりするだろ？」

「フフフ…」

「ん？　なんかおかしいこと言ったかな、俺？」

至極真っ当な意見で、何とか美衣を追い返そうとするが、何故かクスリと笑われてしまう。

思わずその仕草にドキリとしてしまうが問題はそこではない。

軽く息を吐いて自分を落ち着かせながら、今の言葉に何かおかしな点がなかったか考

える。
「…ううん。ただ、前と同じことを言うんだなって」
「そ、そうか」
どうやら前世とやらでも美衣は俺の家に押しかけてきていたらしい。
もしかすると美衣に付きまとわれるのは、縁というよりも業（カルマ）なのかもしれない。
「まあ、それはいいか。とにかく、親御さんは大丈夫なのか？」
「…大丈夫。お父さんもお母さんも頑張ってこいって言ってくれたから」
「何と言うか……愉快なご両親だな」
「うん…私もそう思う」
目に入れても痛くない愛娘が、男の家に行く（不法侵入）というのに何も言わないとは驚きだ。俺が父親なら絶対止めるというのに。娘の将来のためにも、自分の世間体のためにも。
「…親の了承は得ているから…太郎と一緒に住むのに問題はないよ」
「え？　一緒に住むの？」
「…夫婦は一緒に住むものだよ…？」
押しかけてきただけかと思っていたら、まさかの同居宣言に一瞬目まいが走る。
いや、確かに夫婦なら一緒に生活するのは当然だと思うが、これは何か違うだろう。

そもそもな話だ、いきなり可愛い女の子と同棲しろだなんて言われても受け入れられない。
「ちょ、ちょっと待ってくれ。いくら美衣が大丈夫でも俺にも都合というものが……」
「ダメ…？」
「うッ…」
目をウルウルとさせて、子犬の様にねだってくる美衣。
ダメだ。今すぐにでも頷いて彼女を安心させてあげたい。
でも、それではダメだ。これは、なあなあのままに流して良いことじゃないだろう。
「み、美衣」
「なに…？」
だから、しっかりと美衣の目を見て、偽りの無い自分の気持ちを伝える。
「その、だな。俺は前世の記憶とか思い出せないし、美衣の話が本当かどうかも分からない」
「うん……」
無表情な瞳にほんのりと悲しみの色を覗かせる美衣。
そんな彼女を安心させられるか分からないが、俺は戸惑うことなく言葉を続ける。
「でも、君が俺のことを愛しているっていうのは信じられる」

美衣については、正直分からないことばかりだ。
でも、美衣の好きだという言葉だけは信じても良いと思えた。
だって、彼女の言葉は嘘だなんて思うことすらできないような、真っすぐなものなのだから。
「だから、こんなモヤモヤした感情のままで答えを返したくない」
「太郎……」
「だからさ、これから少しずつでもいいから君のことを俺に教えてくれないかな？　君にとっては二回目になるかもしれない。辛い思いをさせてしまうかもしれない。でも、君のことを良く知らずに、君の好きだという言葉に返事をしたくない」
スーッと大きく息を吸い込んで、美衣の瞳を真っすぐに見つめ返す。
「君のことを知りたい。君の全てを知った上で返事をしたい。……それじゃあ、ダメか？」
告白でないというのに、バクバクと鳴り響く動悸を抑えながら彼女の返事を待つ。
もしかしたら失望されるかもしれないし、嫌われるかもしれない。
だとしても、彼女に対していい加減なことはしたくなかった。
「…いいよ。また私を知ってくれるなら…許してあげる」
「本当か？　ありがとう」

そして、そんな俺の身勝手にも関わらずに美衣は頷いてくれる。選択肢を1つ間違えるだけで、何かとんでもないことをしでかしそうな美衣なので、どうなるかと思ったがどうやら俺の杞憂だったらしい。これで美衣も諦めて自分の家に…。

「……それじゃあ、ご飯にしよう。その後は一緒にお風呂に入ってから寝よ？」

「そうだな。ご飯に…え？」

「どうしたの…？」

「いや、一緒にお風呂はダメだろ！　というか、結局一緒に住むのは諦めてないのか!?」

一件落着かと思っていたが、どうやらその認識は激しく間違っていたらしい。

「……だって一緒に生活する以上に、お互いを知る方法なんてないよ」

「た、確かにそうかもしれないが、少なくとも一緒に風呂に入ったり寝たりする必要はないだろ！」

「…？　私は太郎が体を洗う時は左腕から洗うってことも…寝るときは横向きじゃないと寝られないってことも知ってるよ…？」

何でそんなことまで知っているだろうか、この子は。

ここまでくると逆に前世で夫婦だったからというのを信じたほうが、安心できるレベルだ。

仮に前世抜きだとすると、俺が常に監視されていることになるから怖すぎる。

「でも…もし太郎がどうしても…私と一緒に暮らしたくないって言うなら……」
「い、言うなら?」
やけに間を置いた話し方に思わずゴクリと唾を飲み込んでしまう。
そして、案の定と言うべきか。美衣の提案は吹き飛んだものだった。
「……私の生活を２４時間ずっと監視カメラで見て私の全てを知ってもらう」
「分かった、一緒に暮らそう。そこまでやるともう俺が変態にしか見えない」
女の子の生活を２４時間監視し続けるとか犯罪者でしかない。
中には喜ぶ人も居るかもしれないが、生憎俺はノーマルな性癖なのだ。
監視カメラで見るぐらいなら、一緒に生活した方がまだマシだろう。
「一緒に…暮らそう……プロポーズ」
「いや、違うから。言葉的にはそうかもしれないけど、ロマンチックさが欠片もないから」
表情を変えないまま、器用に頬を赤らめて恥ずかしがる美衣にツッコミを入れる。何と言うか、美衣は掴みどころがなく、それが逆にどうやっても逃げられない雰囲気を醸しだしている。
「…でも、一緒に暮らすのはＯＫなんだよね…?」
「う、ああもう!　俺も男だ。一度言ったことは曲げない。美衣、これからよろしくな」

「うん……不束者ですがよろしくお願いします」
「いや、その言い方は気が早い…じゃなくて違うだろ」
「大丈夫……今は間違いでもいつか本当にして見せるから…必ず」
必ずという言葉に込められた熱意というか、意志に思わずゾッとしてしまうが俺には苦笑いを浮かべることしかできない。いや、だって本気で逃げようとしたらそのうち監禁とかされそうだし。だから、俺ももう彼女と一緒に暮らす覚悟を決めるのだった。
「…それじゃあ、ご飯にしよ？　…それから一緒にお風呂」
「お願いだから、一緒にお風呂だけは勘弁してください」
もっとも、一緒にお風呂に入るなどという大それた覚悟は無理だったのだが。

2話：信じるということ

「おはよう…太郎」
「……おはよう、美衣」
「凄いクマ…眠れなかったの…？」
　朝起きてすぐに挨拶をするなんて、久しぶりだなと現実逃避をしながら目をこすっていると、美衣が心配そうに俺の顔を下から覗き込んでくる。彼女の言うように俺はほとんど眠ることが出来なかった。その理由は簡単。
「なあ、やっぱり別々の布団で寝ないか？　緊張して眠れないんだよ……」
「…嫌。一緒にお風呂に入ってくれないんだから…寝る時だけは絶対に一緒…」
　美衣と一緒の布団で寝たからだ。
　言っておくが誓って美衣に手は出していない。
　むしろ、寝ぼけて甘えるように抱き着いてくる美衣から、逃れるのに必死だったぐらいだ。
　そこ、ヘタレって言うんじゃない。
「いや、でもなぁ。間違いとか起きたら――」

「…夫婦なんだから間違いなんてないよ…？」
異性なのだからもう少し節度のある関係をと、言おうとしたが即答されてしまう。
確かに間違いというのは正式な関係でない者達がやることをいうのだから、夫婦ならば問題ではない。
しかし、繰り返すが俺と美衣は夫婦ではないし、会ってからまだ一日しか経っていない。
お互いにもう少し時間をかけるべきだと思う。
まあ、彼女の中では俺達は夫婦である、もしくは未来になることは確定らしいのだが。
「それに……緊張するってことは…私を意識してくれてるんだよね？」
「んんッ、ま、まあそういうことになるのか…な？」
そんなどこかヤンデレ染みた美衣であるが、情けなことに俺が意識しているのも事実だ。
美衣は無表情だが間違いなく美少女だし、時折見せる笑顔なんかは贔屓目無しで可愛い。
何よりなんだか放っておけない感じがする。
「…うれしい」
今も俺に向けられる本当に嬉しそうなホワホワの笑顔はプライスレスだ。こんな顔

を向けられれば誰だって否応なしに意識してしまうだろう。さらに昨日は緊張してよく見てなかったが、ダボッとした普段から使っているであろうピンクのパジャマなんかも俺の好みに合っていてグッドだ。

「…このパジャマは太郎が好きだと思って買ったの」

……本当に前世というものはあるのかもしれないな。

まあ、でないと俺がずっと監視されていたことになるんだけど。

「あ、あー…とにかく、朝ご飯にしようか」

「ふふ…そうだね。待ってて…何か簡単なものを作るから」

「いや、俺が作るよ。朝も晩も作ると大変だろう？」

「……平気。…好きな人のためにやることなら大変なことなんて何もないよ」

そして、迷うことなく俺のことを好きだと言ってくれる。

こんな子を意識しないなんて、女性慣れしていない俺に出来るわけがない。

何より。

「ありがとうな、美衣。でも、俺も手伝うよ」

与えられたのなら、何かを返したいと思うのが人間というものだ。

彼女が愛して欲しいと言うのなら、愛を上げたくなる。

でも、それは義務感だ。

義務感で愛や好きを語るのは、真剣に俺を好きだと言ってくれる美衣に失礼だろう。
だから、俺も彼女に対して一時の感情ではない真剣に向き合わなければならない。
そうして、どんな形であれ答えを出さないとダメなんだ。
そのためには、俺は誰よりも彼女を知らなければならない。
「そう…？　それじゃあ一緒に作ろ…」
「そうだな。あ、それと今日の午後は空いてるか？」
「…太郎のお願いなら親の葬式でも空けるよ」
「それは絶対に止めてくれ。というか、そこまで大切な用事じゃないからな」
やはり、美衣は突き抜けた部分があるなと思いながら、喉を鳴らす。
大切じゃないとは言ったが、今からすることは人生で初めて経験なので緊張はする。
しかし、これも俺が答えを出すために重要なことだ。
なので、俺は覚悟決めて美衣に告げる。
「えーっと、その午後から……デー、いや、買い物に行かないか？」
若干ヘタレたが、頷いてもらえたので目的は達成できたということで、問題はないだろう。

「うーん、この服でも着てみるか」
「…待って。…その服は細めだからサイズが合ってても太郎には少しきつい。…1つ大きいサイズのを着た方が良いよ」
「お、ありがとうな。……ところで何でそこまで分かるんだ？　前世って言っても体格は違うだろ」
「……知りたい？」
「ごめん。やっぱり、やめとく」
今日はデパートに夏物の服を買いに来たのだが、やはり少し早かったのかもしれない。
どういうわけか背筋が冷たく感じるのだから。
「さて、それじゃあ服はこのぐらいにして食材を買って帰ろうか」
「…うん」
俺の言葉に特に不満がることなく美衣は頷いてくれる。
しかし、俺の内心では不安が渦巻いていた。
仮にも女の子をデートに誘ったというのに、こんなあっさりと帰って良いのだろうか？
もっと、他の場所に行って遊んだりして楽しませるべきではないかと思うが、今の俺

にはこれで精一杯だ。彼女が出来たことの無い俺がいきなり2人っきりで、映画やカラオケなどに行けるはずがない。そういう場所に行く前にもっと場数を踏みたい。

まあ、2人っきりという意味では家では既にそういう状況なのだが、なし崩し的に初回を越えてしまったので不安は少ないのだ。あくまでも少ないというだけなのだが。

「……あ」

「どうしたんだ、美衣？」

そんなことを考えていると、美衣が何かを見つけたように足を止める。

俺もつられて振り返ってみると、そこにはショーケースに入ったウェディングドレスがあった。

「ウェディングドレスがどうしたんだ？」

「…ううん。…前世(むかし)を思い出してただけ」

「前世…か」

美衣が度々口にする前世という言葉。

俺には実感が無いし、本当かどうかも分からないが、それを語る彼女の瞳は真剣そのものだ。

しかし、今回は真剣さ以外のものを瞳の中に見つける。

「美衣、何か悲しそうな顔をしてるけど大丈夫か？」

「…ごめん。分かっちゃう…？」
「別に謝らなくていいよ。それより、どうしてそんな顔をしたんだ」
いつもの平坦な声より若干小さめな、落ち込んだ声を出しながら美衣は呟く。
当然、そんな顔をされてしまっては何事もなかったように過ごすことは出来ないので尋ねる。
「……これを着てた時に言われたことを思い出したの」
「あー…前世の俺が何か酷いことでも言ったのか？」
「…ううん…太郎は綺麗だって言ってくれたよ。思い出したのは神父様の言葉…」
「神父？」
はて、神父が何か花嫁を傷つけるような言葉を言うものだろうか。
そんな疑問符を浮かべる俺に対して、美衣は落ち込みながら教えてくれる。
「……死が2人を分かつまで愛し続けることを誓いますか？」
「ん？　それって何もおかしなことは――ああ」
最初はどこがおかしいのかと思ったが、死が2人を分かつまでとう言葉にハッとする。
神父はおかしな言葉は言っていない。どの夫婦にだって同じ言葉を告げているだろう。

だが、美衣の場合は、いや俺達の場合はちょっとした問題が起こる言葉だ。
「死が2人を分かつまで、つまり死んで生まれ変わったのなら、その誓いは無効になっているかもってことか」
「……うん」
シュンとした表情で俯く美衣。こっちとしては前世の記憶がないので、ダメージは特にないが覚えていると確かに大問題なのかもしれない。そうなると、俺が下手なことを言ってしまうと余計に傷つけてしまうかもしれない。なので、慎重に言葉を選びながら話しかけていく。
「なあ、美衣。……美衣は神様って居るって思うか？」
「神…様？　……居てもおかしくはないと思う」
いきなり神様が居るかなんて言われものだから、首を傾げる美衣。
だとしても、しっかりと答えてくれるのだからやっぱり良い子だと思う。
「まあ、生まれ変わりなんてものを経験したらそう思うか」
「…太郎は違うの…？」
「俺か？　俺は居るとも思うし、居ないとも思う」
俺の玉虫色の回答に美衣は首を傾げるので、説明をつけ加えていく。
「信じる人からすれば居るし、信じない人からすれば居ない。信じたものが真実になる

のさ」
「…よく分からない」
「まあ、分かりにくいか。神様って基本目に見えないだろ？　でも、見えないからって居ないとは言い切れない」
「…私は居ると思うけど…見えないから居ないって言う人の気持ちは分かるよ…？　私も死ぬまでは信じてなかったから……」
自分の目で見えないものは信じられないという美衣の言葉に頷く。
確かに多くの人はそういう考えだし、当の宗教だって偶像や奇跡を使って目に見える形にする。
そうした方が多くの人に信じてもらえるのだから、ある意味で当然の行為だろう。
でもだ。ほとんどの人間は目に見えないものを、日常的に信じていることを忘れている。
「俺は神様っていうのは愛に似ていると思うんだ」
「愛に…？」
「そう。どれだけ神は居ると（愛している）雄弁に語ったとしても、どちらも本当にあるかなんて分からない。証明することなんて出来ない。だとしても、人間は愛を信じている。あるかどうかも分からないのに相手の愛を漠然と信じ込む」

相手の心の中なんて見えはしないのに。
そもそも自分以外のものが、確かに存在しているなんて分からないのに。
本当の自分は、脳味噌が液体ポッドに入っているだけの存在かもしれないのに。
人間は信じる。愛はあると、世界は存在していると。
「この世で唯一確実にあると言えるものは、『我思う故に我あり』で自分の自我だけだよ。他人は例え目の前に見えたとしても幻想の可能性もあるからね」
更に言うと、相手が確かに存在していると証明出来ても、相手の心や意識を確かめる術はない。人間の行動が電気信号で行われるものである以上、相手が生きている必要はない。ラジコンの様に電波を飛ばして、生きているように振舞わせれば傍からは自我があるかどうかなんて分からない。それでも人は信じるのだ。自分以外のものが実際に存在していると。
「でも、それでいいんだ。自分以外の全てが証明できないのだとしても、人は信じなければならない。だって、嘘だったのだとしても信じなければ何も始まらないんだから」
全てを疑い、全ては存在しないと決めつけてしまえば、そこで人間は死ぬだろう。
だって、全てが幻想だと思うのなら生きる意味がない。努力する意味がない。
肉体的にも精神的にも価値がなくなってしまう。
そんな状態になるぐらいなら、例え幻想だとしても何かを信じて生きた方がマシだ。

「……えっと…それで結局どういうことになるの？」
「信じるも信じないも自分次第ってことさ。『死が2人を分かつまで』という言葉を信じるのも良し、そんなのはただの形式だと思って死んだ後でも愛し合えると信じるのも良し。自分の好きな方を信じればいい、それが美衣にとっての真実になるから」
「私の真実……」
そう言って美衣は考え込む様に俯く。
と、言っても俺からは彼女の顔が見えないので実際の所は分からない。
もしかすると、訳の分からないことを急に語り始めた俺に失望しているのかもしれない。
そんな女性慣れしていないが故の不安を抱いていると、美衣が顔を上げる。
彼女の顔は、どういうわけか満面の笑みだった。
「…うん…そうだね。私の信じたいように信じればいいんだね…」
「ああ、それでいいと思うよ」
「…私と太郎は生まれ変わっても愛し合える…例え…幾千、幾万の輪廻を廻っても必ず……」
「そ、そうか。それは凄いな」
純愛と言えば聞こえはいいが、やはり美衣の愛情は重い。

ブラックホール級の重力を発しているような気さえしてくるほどだ。
だとしても。
「ねえ…太郎…」
「ん？」
「太郎は……私の愛してるって言葉を信じてくれる…？」
「もう忘れたのか。昨日、君が俺を愛してくれているっていうのは信じられるって言っただろ？」
俺は美衣のことをどうしても、嫌ったり遠ざけたりすることが出来ない。
今も嬉しそうに顔を綻ばせる彼女を見ているだけで、悲しませなくて良かったと思える。
「惚れっぽいのかな…俺」
出会って1日しか経っていない女の子を、どうしようもなく気にかけている自分に思わず苦笑してしまう。女慣れしていないからだと言われればそれまでだが、美衣には色々と隠し立てせずに話せるのも事実だ。ただ単に、一目惚れしたのか。それとも。
「本当に前世で夫婦だったのか……」
「…どうしたの、太郎？」
「いや、何でもないよ。さ、いつまでもこんな所に居てもしょうがない。食材を買いに行

こう」

「うん…」

ほんの一日で、俺も随分とスピリチュアルなものを信じるようになったものだなと思うが、これはこれでいいのかもしれない。美衣に言ったように自分が信じたいものを信じれば良い。何より、愛し合った2人が生まれ変わっても結ばれる話なんて。

「俺も信じてもいいかもしれないな」

とても素敵じゃないか。

3話：あなたを愛しています

最近、友人(太郎)の様子がおかしい。
何かを悩む様に考え込むことが増えたし、遊びに誘っても来なくなった。
聞いてもいつも誤魔化すし、絶対に真っすぐに家に帰る。
前ならば、ノリ良く遊びについてきていた太郎がだ。
おかしい。これは明らかに何か問題があったに違いない。
なので、俺は太郎の友人として問題を突き止めるために学校帰りのあいつをつけることにした。
校門を出た太郎は、人目を避けるように人の少ない公園へと向かっていく。
その姿に俺は、間違いなくあいつは何か人に知られたくないことをしていると確信する。
黄昏時に人気の居ない公園……下手をするとドラッグの売人と会っているのかもしれない。
その場合は友人として殴ってでも止めてやらないといけないと、俺の拳に自然と力が

籠る。だが、太郎が公園に着いた時に俺は、ドラッグの売人なんて目じゃない程に恐ろしいものを目にすることになった。
「ごめん、待ったか、美衣？」
「……ううん。…私も今来たところだから」
「そっか。それじゃあ、帰ろうか」
「…ねえ、手を繋ごうよ…太郎」
「え？　あ、ああ…いいぞ」
俺の目に映るのは、花のような笑顔を咲かせたＴＨＥ大和撫子といった感じの美少女。
そして、その笑顔の全ては1ミリたりとも逸れることなく、太郎に向いていた。
「ふふふ…私は今とっても幸せだよ…」
「あー……まあ、俺も幸せだよ」
彼女と仲良く手を繋いで帰るあいつを見て、俺は善意が裏切られる瞬間を知った。

「チクショォオオオッ!!　リア充は滅びやがれーッ!!」
美衣との帰り道。

突如として血を吐くような叫びが聞こえてきたので、慌てて俺は振り返る。
しかし、叫び声の主は既にこの場から去っていたのか見えない。
「何だったんだ一体…？　というか、どこかで聞いたことのある声だったような」
「……計画通り」
「ん？　何か言ったか美衣？」
「…何でもないよ、太郎」
美衣が何かを呟いたような気がするが、どうも俺の気のせいだったらしい。
「……太郎の友達に私達の姿を見せつけて…逃げられないように外堀から埋めようだなんて、これっぽっちも思ってないから…」
何か背筋が冷たくなるような呟きを聞いたような気がするが、気のせいだろう。
気のせいだと言ったら気のせいだ。
美衣は優しくて健気な女の子なんだから、嘘をつくはずがない。そう信じている。
「そ、そう言えば、今日の晩御飯は何なんだ？」
「…今日は麻婆豆腐だよ」
「麻婆豆腐か……実は俺、辛いものは少し苦手――」
「…大丈夫。ずっと前から知ってるから…ちゃんと甘口だよ」
「そ、そっか。そう言えばカレーの時もちゃんと甘口にしてくれていたよな」

ずっと前から。その言葉差すものは前世のことだろう。
美衣と暮らし始めてから結構な時間が経ったが、未だに俺は前世(それ)を思い出せない。
「……」
「…どうしたの太郎？　急に黙り込んで」
「ああ…いや……自分でもよく分からないんだ」
急に黙り込んだ俺を心配して、美衣が上目遣いで見つめてくる。
そこに打算などない。ただ、純粋に愛している人間への思いやりだけがある。
まあ、純粋過ぎて偶に暴走しそうだと思う時もあるんだが。
「……自分でも分からない？」
「なんだかな。モヤモヤとした感情があるんだけど、その正体が分からないんだ」
でも、最近ではそんな彼女の瞳を見る度に、訳の分からない感情が溢れ出す。
苛立ちと似ているかもしれない。でも、その本質は違う気がするし。
何より、なぜ苛立っているのかがまるで分からない。
美衣に対してなにかしら不満を抱いているという訳ではないと思う。
「まあ、美味いものを食べれば忘れるか。美衣、よろしく頼むな」
「……うん。元気が出るように料理をするから」
だから俺は気楽に話しを切る。

それが、とんでもないことを起こす引き金になるとも気づかずに。

「……太郎…ちょっと来てくれる？」

「ん？　ああ、今行く」

美衣が料理を作っているのを待ちながら、リビングでテレビを見ていると不意に呼び出される。

何か問題があったのかとソファーから腰を上げて、すぐにキッチンへと向かう。

「……私も食べたけど…太郎にも味見をして欲しいの」

告げられた内容は特に問題のないものだった。

料理を作っている以上は何ら不思議な言葉じゃない。

だが、しかし。問題は美衣の格好にあった。

「み、美衣…！　そ、その恰好は…？」

「…裸エプロン…好きだよね…？」

「確かに好きだけど！　好きだけど！」

そう。美衣の服装が裸エプロンであったのだ。

普段は大和撫子といった感じの美衣の、過激な姿は破壊力が抜群だ。

しかも、俺の性癖を抑えているのか、エプロンの端を恥ずかしそうに引っ張っている姿が更にグッドだ。

「て、そういうことじゃない！　なんで急にそんなことをしたんだ!?」

「……なんだかモヤモヤするって言ってたから…」

「もしかして、俺を元気づけようとしてくれたのか？」

「…うん。前も元気の無い時はよくこうしてた…」

コクンと頷く美衣の姿に、思わず頭を抱えてしまう。

取り敢えず裸エプロンになれば元気になるって、どんだけ単純なんだろうか前世の俺は。

いや、確かに俺も色々な所が元気が出ているので、人のことは言えないんだが。

「…どう？　モヤモヤは晴れた…？」

「正直、美衣の裸エプロンの衝撃が強すぎてよく分からん。まあ、元気は出たけどさ。……それにしても前もか。前世の俺が羨ましいよ」

「……もしかして」

目の前の魅力的過ぎる料理をつまみ食いしないように、必死に心を抑えて冗談を言う。

しかし、美衣の方はそんな俺の何気ない言葉に何かを見出したのか、小さな口を開く。

「…太郎――――前世の自分に嫉妬してる…？」
「…え？　そんなことは……」
言われた瞬間に頭は何を言っているのだと反論を開始する。
自分で自分に嫉妬なんてするわけがないだろうと。
だが、心は言われた瞬間に納得をみせる。
他の男に美衣の笑顔が向いていたという事実に、自分は嫉妬していたのだと。
「ああ……そうかもしれない」
一度自覚してしまえば腑に落ちるのは早かった。
俺は前世のことを思い出せていない。
それは、今の俺にとっては前世の自分は別人ということだ。
「嫉妬してたんだろうな、俺。自分のことだって言うのに」
自分で言っていて恥ずかしくなってきたので、ごまかすように頭をボリボリと掻く。
「…ふふ。うれしい」
「嬉しい？　何でそう思うんだ？」
しかし、どういうわけか美衣はそんな俺の様子に嬉しそうに笑う。
一体何が彼女の琴線に触れたのかと首を傾げながら尋ねる。
そして、彼女の答えを聞いて一気に赤面してしまうのだった。

「…だって…嫉妬するってことは…美衣のことを誰にも取られたくないってことだよね…？」

「え…あ、あー……」

図星だった。何の言い訳もできない程に答えを言い当てられてしまった。

そうだ。嫉妬というものはどうでもいい人間に抱かない。

美衣が好きだから。彼女のことを独占したいと思っているから。

前世の自分にすら嫉妬の心を抱いてしまったのだ。

「そうだな……誰にも取られたくないんだ。ごめんな、束縛するみたいで」

「…ううん…嫉妬なんて誰だってするものだよ。美衣だって太郎が他の女の子の話をしてたら……うん」

「み、美衣？　手が尋常じゃないほど震えているから、取り敢えず包丁を降ろそうか。……本当にお願いします。色んな意味で怖いんです」

俺が他の女の子の話をしている姿を想像したのか、目から光を消す美衣。

手にした包丁が向かう先が分からないので、優しく彼女の手を抑える。

「……ごめんなさい。ちょっとボーっとしてた」

「大丈夫。大丈夫。俺は美衣の前で他の女の子の話なんかしないから」

「…うん…ありがとう」

目に光を取り戻し、少し安心した表情を見せる美衣。
その姿に胸を撫で下ろしながらも、俺は前世はひょっとすると無理心中で死んだのかもしれないと思うのだった。
「それじゃあ、話を元に戻そうか。その…俺が前世の自分に嫉妬するのは…美衣のことが、す、好きだからだと思う。いや、好きなんだ」
「……うん」
好きというたった2文字を言うのに、これほどまでに勇気が居るのかと口にしながら思う。
だが、言ったかいはあった。美衣のこんなにも可愛らしい顔が見れたのだから。
無表情の顔を真っ赤に染めながらも、潤んだ瞳で精一杯に俺を見つめてくれる。
これは癖になるかもしれない。というか、既に虜になった気がしないでもない。
「だからさ……君と最初に会った日に言われた『好き』という言葉に返事をしたい」
初めて、まあ、前世があればそうではないかもしれないが。
とにかく、最初に美衣に会った時に待ってもらっていた返事を、今なら返せる気がする。
「長いようで、短い期間だけど、一緒に君と過ごして君を知った。まだ、とてもじゃないけど君の全てを知ったとは言えないと思う。それでも、今から言う言葉に嘘なんかない

し、これからずっと先も変わらないと思う」
スーッと、大きく息を吸い込み一世一代の告白を始める。
「未だに前世のこととかは分からない。
でも、今ここに居る俺は美衣のことが大好きだと断言できる。
……それじゃあ、ダメかな？」
前世の記憶なんて蘇らないし、美衣のことを一緒に添い遂げた女性とも思えない。
彼女と一緒に居ればいつだって緊張してしまうし、新鮮なトキメキを感じる。
美衣と夫婦だったなんて、間違っても言えない。
でも、美衣が大好きだとは胸を張って言えるし、ずっと一緒に居たいとも断言できる。
ああ、そうだ。愛しているんだ。どうしようもない程に。
前世の嫁を名乗るこの不思議な女の子を。
「……ずっと」
「うん」
「…ずっと…待ってた……もう一度好きって言って貰える日を」
美衣の瞳から音もなく涙がこぼれ落ちる。
慌てて、指でそれを拭おうとするが、その手を彼女の白く細い手に掴まれてしまう。
そして、涙を拭くためではなく、頬ずりをするのに使われてしまう。

彼女の温もりと柔らかさが肌を通して直に伝わってきて、思わず唾を飲み込む。
「美衣？」
「…嬉しい…大好きな人に…好きって言って貰えるのは…嬉しくて気持ちがいい」
何となくおかしいような気もするが、とても幸せそうな表情をしているので大丈夫だろう。
息はやたらと荒く、肌は艶めかしいピンク色に紅潮し、目は必要以上に潤んでいるけど大丈夫。
な、わけが無いので、心配して口を開く。
「み、美衣？　大丈夫――」
「……ダメ。もう…我慢できない…！」
だが、その次の瞬間に俺は美衣に信じられない力で押し倒されていた。
そして、美衣は裸エプロンという官能的な姿で俺の上にのしかかってくる。
訳が分からない。なぜ、こんな状況になってしまったのかと現実逃避気味に、目を美衣から逸らす。すると、床に明らかに怪しいピンク色のビンが転がっているのを見つける。
「なぁ、美衣。もしかして、料理に何か入れた？」
「……元気が出る薬」

「そうかぁ、元気が出る薬かぁ。それで、味見とかもした？」
「…料理を作るんだから当然」
見ている方が焼けるほどの熱い視線を俺に送りながらも、律儀に応えてくれる美衣。
なるほど、元気（意味深）が出る薬か。
そうだよなぁ……俺を元気づけようとしてくれたんだもんな。
「えーっと、そのだ。幾ら、告白したからと言っても早くないかな？　もう少し段階をさ？」
「……今まで散々待たせたんだから遅いぐらい。……それにもう同居もしてるんだよ？」
俺の反論を正論で叩き潰してきながら、美衣は俺の服を慣れた手つきで脱がしてくる。
なるほど、これが逆レというものか。と、1人納得しながらもさらに反論を続ける。
「いや、まだ俺達は学生だし……」
「…ねえ、美衣のことを愛してる？」
「ああ、もちろんだ」
「……じゃあ、問題ないね」
愛し合っているからセーフと言ってくる美衣に、俺も何も言えなくなってしまう。

いや、ここでまだ反論したら愛してないみたいじゃん。
だから、俺は全てを諦めて受け入れることにする。
「その……初めてだから優しくしてくれ」
「…大丈夫。…太郎の気持ちのいい所は全部知っているから」
拝啓、お父さんお母さん。俺は今日、大人の階段を昇ります。